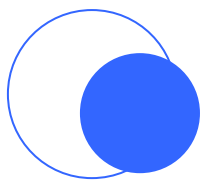


沿革

昭和44年2月26日	「県立自然科学博物館設置について」県議会に請願が行われた。
昭和44年6月5日	県議会において請願が採択された。
昭和48年6月	兵庫県自然保護協会から環境保全・自然保護活動の分野の博物館設置について要望書が提出された。
昭和51年5月	IFHP 兵庫国際会議が開催され、人間居住環境研究センターを設置する必要性が認められた。
昭和59年4月	自然系博物館建設調査費が予算計上された。
昭和61年12月	兵庫県立自然系博物館建設基本構想（報告）が策定された。
昭和63年8月	自然系博物館は三田市のホロンピア館を活用して建設することが決定した。
平成元年4月1日	兵庫県教育委員会社会教育・文化財課に自然系博物館（仮称）設立準備室が設立された。
平成3年12月	研究・収蔵棟が完成した。
平成4年3月	本館（ホロンピア館）の様式替え工事が完了した。
平成4年4月1日	兵庫県立人と自然の博物館の設置および管理に関する条例および同規則が施行され、同時に博物館内に姫路工業大学自然・環境科学研究所が設立された。
平成4年6月	ジーンファームが完成した。
平成4年9月	エントランスホール、コートヤードゾーン、屋内展示工事、情報センター設備が完成した。
平成4年10月9日	兵庫県立人と自然の博物館開館および姫路工業大学自然・環境科学研究所開所の記念式典が挙行された。
平成4年10月10日	兵庫県立人と自然の博物館が開館した。
平成9年6月14日	マレーシア国立サバ大学と国際学術交流協定を締結した。
平成9年11月4日	文部省の科学研究費補助金取扱規定による研究機関に指定された。
平成10年3月12日	日本育英会施行令による日本育英会の第一種学資金の返還を免除される職を置く研究所に指定された。
平成11年11月13日	NPO 法人「人と自然の会」（博物館ボランティア）と協力協定を締結した。
平成13年4月	兵庫県教育委員会行政組織規則の改正に伴い、博物館の組織が大きく改編され規則の改定を行い、博物館事業の新展開を公表した。
平成14年4月	博物館事業の新展開を着実に推進するために、平成18年度までに実現させる数値目標と考え方を示した中期目標を公表した。
平成14年10月	博物館が開館10周年を迎え、10周年記念式典を執り行った。
平成16年4月	県立大学の統合に伴い、博物館に設立する研究所を兵庫県立大学自然・環境科学研究所に改称した。
平成18年9月	丹波地域で恐竜化石が発見され、発掘を開始した。
平成19年3月	新たな「兵庫県立人と自然の博物館」基本構想を策定した。
平成20年3月	新たな「兵庫県立人と自然の博物館」基本計画を策定した。
平成20年4月	「ひとはく恐竜ラボ」がオープンした。
平成22年6月	篠山層群における恐竜・哺乳類化石等に関する基本協定を締結した。
平成24年10月	博物館が開館20周年を迎え、20周年記念式典を執り行った。移動博物館車「ゆめはく」の運用を開始した。
平成25年3月	「ひとはく将来ビジョン」を策定した。
平成30年8月	「新収蔵庫棟 基本構想」を策定した。
令和4年10月	「新収蔵庫棟 コレクションナリウム」がオープンした。
令和5年3月	「ひとはく将来ビジョン2032」を策定した。



ひとはく未来ビジョン

ひとはくは、開館 20 周年に「ひとはく未来ビジョン」を策定し、これに基づく新たな活動にも積極的に取り組んできました。しかし、策定から 10 年が経過し、ひとはくを取り巻く社会状況は大きく変化したとともに、活動を進めていく上での課題も顕在化してきました。

ひとはくは、このような状況に対応するための取り組みの一環として、開館 30 周年の節目に「ひとはく未来ビジョン 2032」を策定しました。このビジョンでは、ひとはくが目指すべき将来像と、その実現のために必要な方向性をまとめています。

「ひとはく未来ビジョン 2032」では、ひとはくの今後の活動の方向性を簡潔に示すスローガンとして「みんなと共に、地域と共にーひょうごの自然・環境・文化の多様性を守り、育む社会を目指してー」を設定しました。さらに、ひとはくの将来像として以下の 5 つの博物館像を掲げています。

- ① リアルなモノ・コト・ヒトとの触れ合いに基づく多様な学びをすべての人に提供する博物館
- ② 自然・環境・文化を継承する担い手の活動を支援する博物館
- ③ 自然・環境・文化と身近な暮らしをつなぐ博物館
- ④ 自然・環境・文化の継承に資する先導的・独創的な研究・シンクタンク活動を行う博物館
- ⑤ 博物館標本・資料の持つ価値をすべての人とひらく博物館

ひとはくは、これからもみなさまとの協働を通じて博物館と地域の未来について思索し、行動し、提言し続けていきます。

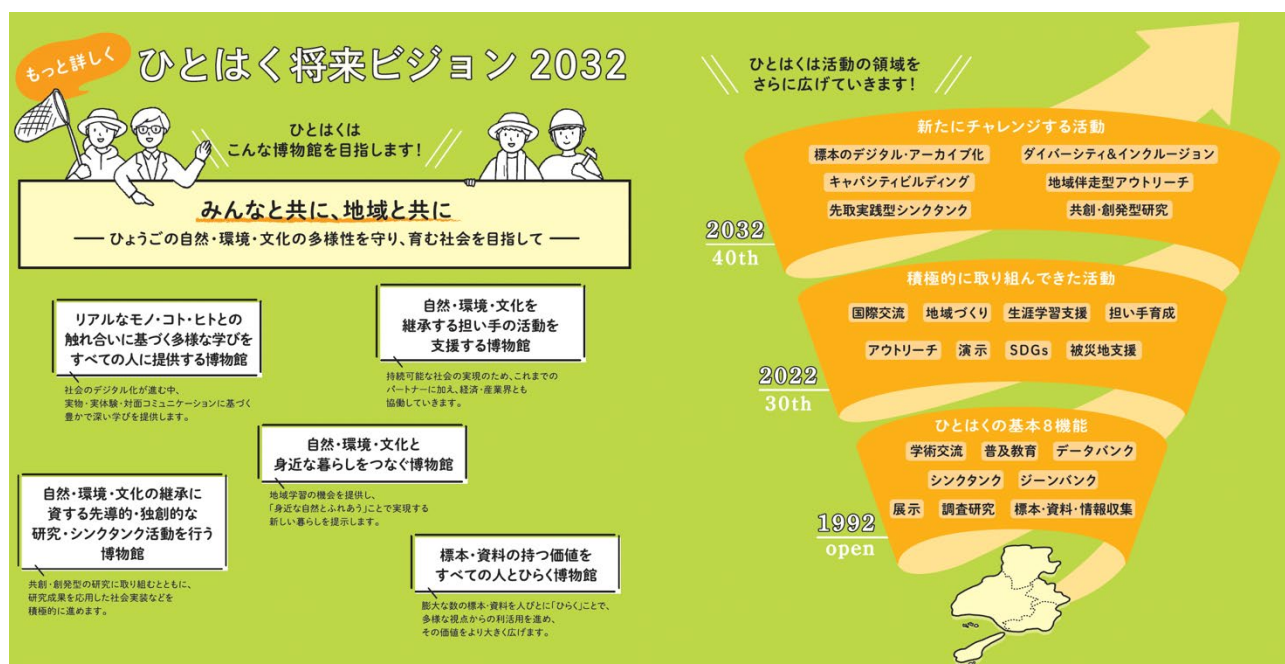
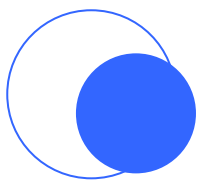


図 ひとはく未来ビジョン 2032 の概要



常設展示の概要

○ 本館3階

■ 兵庫の自然誌

兵庫県は日本海と瀬戸内海・太平洋に面した数少ない県の一つで、北部の多雪地帯から南部の暖温帯まで、多様な自然があります。人々の生活は多様な自然の影響を受けていますが、一方で人々の生活も各地の自然に強く影響を与えています。ここでは、但馬、丹波、播磨、摂津、淡路の特色ある自然を標本、映像、ジオラマなどで紹介します。「森に生きる」には、兵庫県に生息する野生動物をはく製で紹介しています。



■ ナチュラリストの幻郷

博物館の収蔵庫には多くの方々から寄贈していただいた資料が保管されています。

このコーナーでは江田茂氏による 27 万点に及ぶ昆虫コレクションや小林桂助氏による貴重な鳥類のコレクションをはじめとする、多種多様な寄贈標本の一部を紹介しています。



■ 人と自然

先人達がいかに自然とうまくつきあってきたか、昭和以降にその関係が急速に変化してきたことを、ジオラマや映像などで紹介します。また、“モノ”と“ゴミ”が、豊かな暮らしのあり方や環境問題を問いかけます。



■ 兵庫の恐竜化石

兵庫県には古生代から新生代までの地層が分布しており、古くからアンモナイトや植物等の化石が知られてきました。最近も、篠山層群から発見されたタンバティタニスや、淡路島で見つかったヤマトサウルス等、貴重な化石が続々見つかっています。本展示では各化石産出層の特徴を概説するとともに、各地域から産出する代表的な動植物化石を展示しています。





○ 本館2階

■ 水生生物の世界

川や海といった水中に暮らす生物の食物連鎖や環境への適応を展示しています。淡路のナガスクジラの骨格標本、アオザメの本剥製や川の上中下流の魚類などの標本があります。

○ 本館1階

■ 地球・生命と大地

約38億年前の生命の誕生から人類の誕生までの生物の歴史を、多くの化石標本でたどります。また、森林の多様性、地球のプレート運動や地磁気の仕組み、日本列島の生い立ちを紹介します。



2015年には一部改修工事を行い、寄贈されたクドウ地科学コレクションの鉱物資料を中心に兵庫県に産する岩石や鉱物を紹介する「ひょうごの岩石・鉱物」コーナーを新設しました。2020年には、久野武鉱物コレクションから兵庫県産の寄贈標本を選別、展示しています。

■ 共生の森

マレーシア国立サバ大学との学術交流協定に基づき、ラフレシアやオランウータンなどボルネオ島の貴重な標本類を展示しています。生物多様性の豊かな熱帯雨林を体感しながら学ぶことができます。



○ 本館4階

■ ひとはくサロン

自由に閲覧できる「図書コーナー」や、自然環境についての最新の情報が集められている「情報コーナー」のほか、「さわれる標本コーナー」や「休憩コーナー」などがあります。また随時、ミニ企画展を行っています。



別 棟

○ ひとはく恐竜ラボ

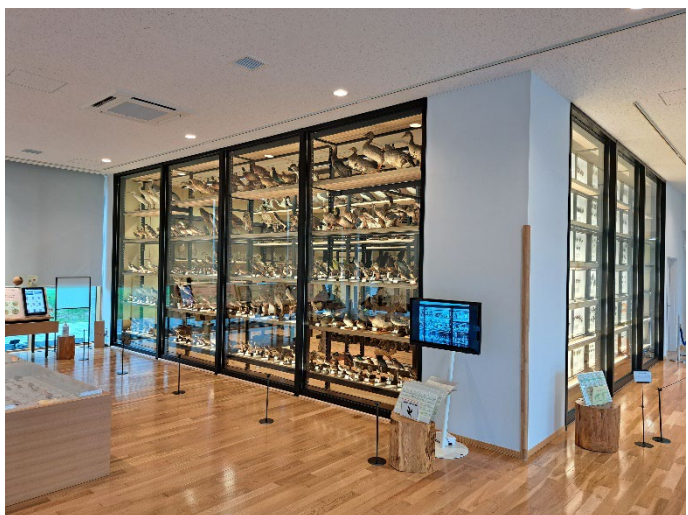
恐竜化石のクリーニング作業及び展示等を行う施設として「ひとはく恐竜ラボ」が2008年4月にオープンしました。化石のクリーニング作業風景を間近に見ることができます。

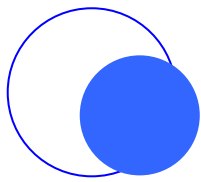


○ コレクショナリウム

2022年に完成した新収蔵庫棟です。1階は公開エリアで、収蔵庫をガラス壁越しにみることができる魅せる収蔵庫、資料収集の意味や価値を説明する展示ギャラリー、図鑑や標本資料をおいたワークルームがあります。

2階は植物標本収蔵庫で、通常非公開ですが、年数回見学ツアーを行っています。





収蔵標本資料の概要

○ 当館の標本資料—県民の収蔵庫

当館には 100 万点に及ぶ昆虫標本や 60 万点に及ぶ植物標本などの膨大な標本資料が保管されています。その多くは、県民のコレクターなどからの寄贈によるものです。例えば、収蔵されている昆虫標本の約 7 割は、個人が長年収集された標本からなっており、県内にかつてどのような昆虫が生息していたのかを知ることができる貴重な資料になっています(右図)。当館の収蔵庫は、まさに県民の収蔵庫としても大きな役割を果たしています。

○ 主なコレクション

■ クドウ地科学コレクション (岩石・化石)

2015 年度受贈 (498 点)

寄贈者の工藤智巳氏は但馬の市民研究者で、そのコレクションには貴重な白いヒスイ輝石岩のほか、兵庫県産を中心とした様々な岩石鉱物が収蔵されています。



■ 篠山層群産化石

2006 年から (総数約 45,000 点)

2006 年 8 月に丹波市山南町で地元の地学愛好家により発見された「丹波竜」(竜脚類ティタノサウルス形類)の化石をはじめ、曲竜類、ティラノサウルス類、テリジノサウルス類、トロオドン類などの化石や恐竜の卵殻化石、原始的な哺乳類、カエル類、トカゲ類、植物等の化石のコレクションです。



■ 小林桂助コレクション (鳥類標本)

2001 年度受贈 (14,000 点)

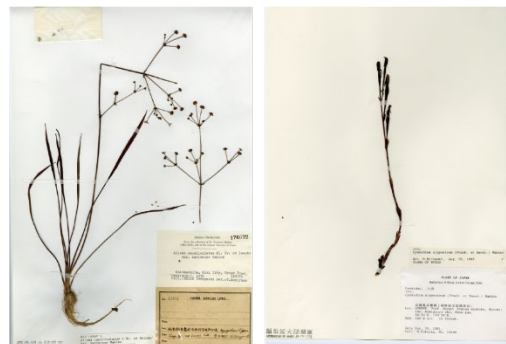
小林桂助氏は本業の傍ら膨大な鳥類標本を収集し、原色日本鳥類図鑑など多数の著書を著した兵庫県の鳥類研究家です。そのコレクションには日本産をはじめ、欧州産や入手困難なオーストラリア産鳥類標本、さらには絶滅したドーダーの骨格断片、エピオルニス(エポルニス)の卵殻破片も収蔵されています。本寄贈により、当館の鳥類標本は山階鳥類研究所に次いで日本で 2 番目の規模となりました。



■ 頌栄短大植物コレクション (植物標本)

2012 年度受贈 (250,000 点)

頌栄短期大学の福岡、黒崎、松村氏によって収集された兵庫県産を中心とした維管束植物のコレクションです。膨大な種数と点数から構成されているだけでなく、兵庫県で 112 年ぶりに発見されたマヤランの標本をはじめ、貴重な標本が数多く収蔵されています。本コレクションの寄贈により、当館が収蔵する植物標本点数は、都道府県立博物館でトップになりました。



■ 阪口浩平コレクション (昆虫標本)

1984 年度受贈 (約 50,000 点)

兵庫県(西宮市)の阪口浩平氏が東南アジアはもとより、アフリカ、南米など世界各地から収集した大型美麗昆虫のコレクションです。その中には、

3,819 点に及ぶノミのプレパラート標本が含まれています。阪口コレクションは他県の博物館や個人コレクターからの譲渡希望にもかかわらず、県内の公共機関での永久保存と公開を強く希望されたご遺族のご厚意で兵庫県が保管することになり、当館設立の契機となりました。



■常木勝次・岩田久二雄・坂上昭一コレクション（昆虫標本）

常木勝次コレクション

1994 年購入・寄贈 （2,000 点）

岩田久二雄コレクション

1999 年度寄贈 （8,600 点）

坂上昭一コレクション

1999 年度寄贈 （32,000 点）

日本のファールブルとも称された常木・岩田・坂上氏が研究・収集したハチ類のコレクションです。日本産のカリバチ 3,000 点に及ぶタイプ標本が含まれ、当館の収蔵資料を活用して発表された学术论文の 8 割近くが本コレクションに基づいています。さらに、このコレクションには常木・岩田・坂上氏が書き残したフィールドノートや図版などが含まれ、日本のハチ類研究の貴重な歴史資料にもなっています。これらのコレクションの寄贈を受けたことが礎になり、当館にはハチ類標本の寄贈が続き、14 万点に及ぶ、日本で最も多くのハチ類標本を収蔵する博物館になりました。



■猪股涼一コレクション（昆虫標本）

1995 年度寄贈 （14,000 点）

猪俣氏が収集した兵庫県産ハバチのコレクションです。阪神・淡路大震災でコレクションを保管さ

れていた自宅が半壊し、標本資料レスキュー活動として寄贈いただくことになりました。コレクションにはハバチ新種のタイプ標本も含まれ、331 種にもなる兵庫県ハバチ類の多様性研究に活用されています。



■江田 茂コレクション（昆虫標本）

2000 年度購入 （272,600 点）

江田氏が世界中から集めた蝶類と甲虫類のコレクションです。大型で美しいものが多く、当館の企画展やキャラバン事業に活用されています。



■芝田太一コレクション（昆虫標本）

2023 年度受贈 （約 48,000 点）

大阪出身の在野の甲虫研究家であった芝田氏と大阪甲虫同好会のメンバーによって構築されたコレクションです。コウチュウ目のほとんどの科が網羅された約 48,000 点の大規模なもので、日本の他、東・東南アジアのものまで幅広く集められています。普通種や希少種を問わず、できるだけ多くの種類・個体数が集められ、科・種ごとに体系立てて整理されたコレクションとなっています。タイプ標本や研究に用いた証拠標本などが膨大に含まれており、国内外の多くの研究者によって活用されてきたことがうかがえます。

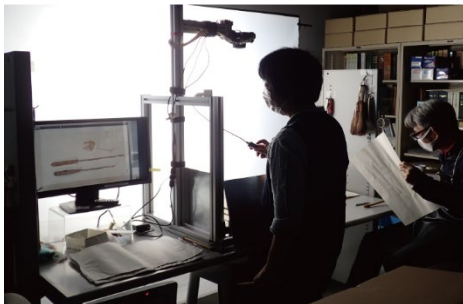


○ 標本管理・保全技術のイノベーション

当館では、世界の博物館に先んじて、標本管理の自動化や低コストで安全な保存技術の開発などにも取り組んでいます。

■植物標本デジタル化技術開発と標本情報の活用促進

標本のデジタル画像化は、破損や劣化を懸念することなく、誰もが標本を利用できるようにする技術です。しかし、従来の植物標本デジタル化の手法では、標本画像の読み込みに膨大なコストと時間がかかります。さらに、採集地などが記載された標本ラベルは人が別途読み込んでデータ化する必要がありました。当館では、植物標本の高精度画像を、1日当たり 500 から 1,000 点撮影可能な新規技術と標本ラベルを OCR（光学文字認識）で読み取り、人工知能（AI）を活用してデジタル化する技術を独自に開発しました。この技術開発により、これまでに合計 19 万点の兵庫県産植物標本をデジタル化し、標本情報の活用を進めています。



■安全・簡便な標本保管技術の開発

これまで収蔵標本の防虫、防カビ管理のために使われてきた燻蒸剤などの化学薬品には、健康被害やオゾン層破壊などの懸念が指摘されており、それに替わる、安全で簡便な標本保全の新規技術の開発が強く望まれています。当館では、天然由来の強力な防虫、殺菌成分である「わさび成分」を防虫剤や燻蒸剤として収蔵庫内の標本保管に使う技術開発を独自に進めています。本技術は、博物館資料だけでなく、侵略的外来生物であるヒアリの忌避剤や殺虫

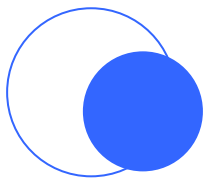
剤としても有効であることも確かめられており、博物館の技術が県民の安全な暮らしを守ることに活用されています。



■標本の樹脂含浸技術（プラスティネーション）の開発

これまで保存や展示が難しかったキノコや水生動物などの標本保存のために、当館ではシリコン樹脂などを使って標本を含浸するプラスティネーション技術の開発に取り組んでいます。この新技術は、ヒアリの巣がコンテナヤード舗装面にできた亀裂から発見された際に、亀裂を簡便に補修する技術としても活用されました。





施設の概要

(1) 規模

- 敷地（設置許可・使用承認面積）：40,836m²、延床面積：20,475 m²

(2) 建物構造

- 本館（鉄骨4階建） 建面積：4,221 m²、延床面積：12,222 m²
- エントランスホール（鉄筋コンクリートドーム型） 建面積：360 m²、延床面積：360 m²
- 研究、収蔵庫棟（鉄筋コンクリート3階建） 建面積 2,327 m²、延床面積：5,988 m²
- ジーンファーム管理棟（軽量鉄骨平屋） 建面積 121 m²、延床面積：121 m²
- ひとはく恐竜ラボ（鉄骨平屋） 建面積 260 m²、延床面積：260 m²
- コレクションナリウム（鉄筋コンクリート一部鉄骨） 建面積 747m²、延床面積：1,509m²
- 管理棟（鉄骨コンクリート） 建面積 15 m²、延床面積：15 m²

(3) 施設の概要

- 本館（鉄骨4階建）

建築家丹下健三氏の設計による全面ハーフミラー張りの建物。展示関係のスペースをはじめとして、研究部・総務課・生涯学習課を設置。さらに500人収容のホロンピアホールも設置。



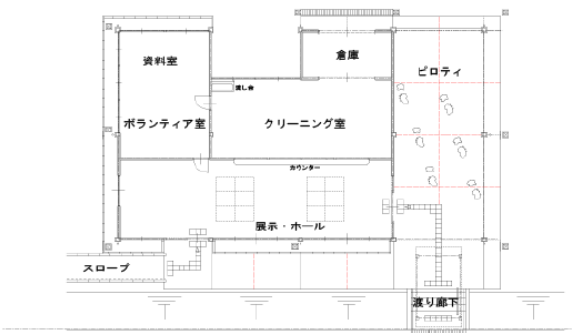
- ひとはく恐竜ラボ

恐竜等の化石クリーニングを進めるための施設。クリーニング室、資料室、倉庫のほか、作業を公開し、発掘調査の成果を展示するホールを設置。

- ジーンファーム

ジーンバンク事業を实践とする場として圃場・ガラス室・研究温室・育成温室・昆虫網室、管理棟を設置し、主に県内産の重要植物の保護・増殖に活用。

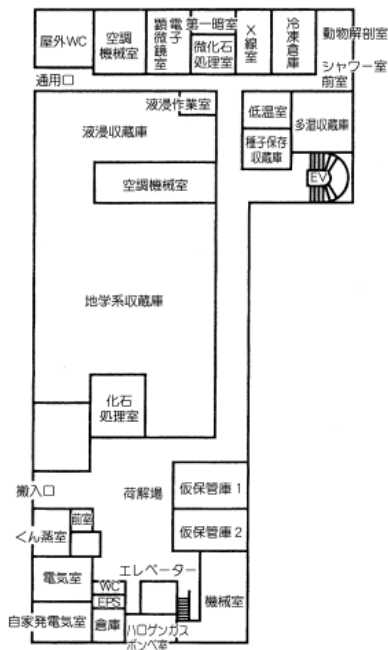
ひとはく恐竜ラボ



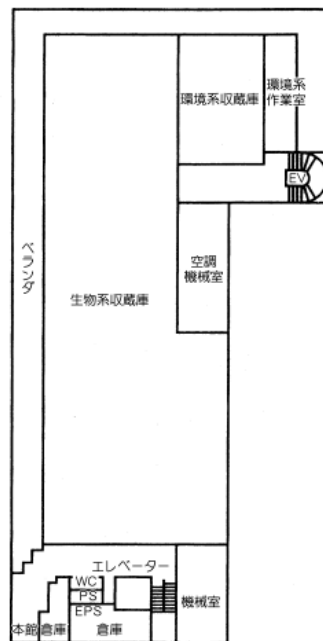
- ・研究、収蔵庫棟（鉄筋コンクリート3階建）

研究や資料整理のための各設備と資料の保存条件に合わせた各収蔵庫を設置。屋上には植栽を実施。

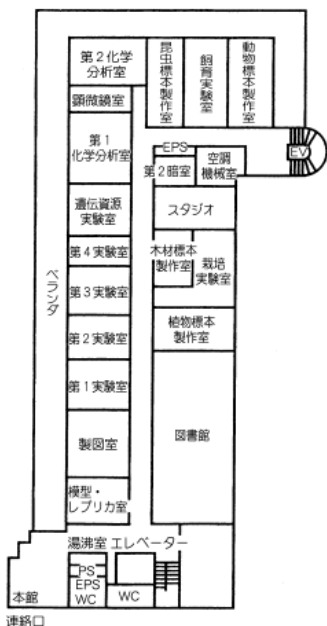
1階



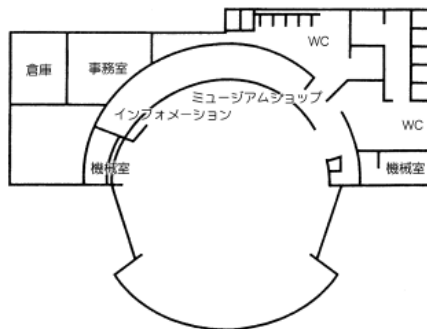
2階



3階



エントランスホール



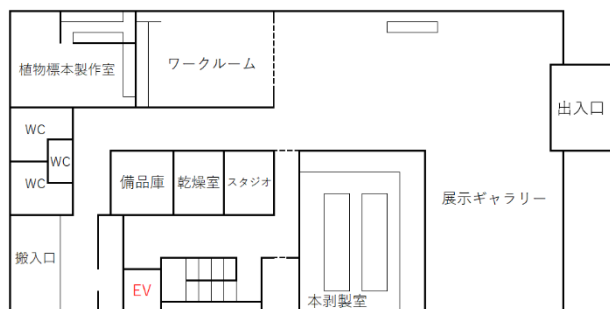
- ・エントランスホール（鉄筋コンクリートドーム型）

博物館への導入的役割を果たしているハーフミラー張りでドーム型屋根の建物。観覧券の発売や博物館の総合案内を実施。

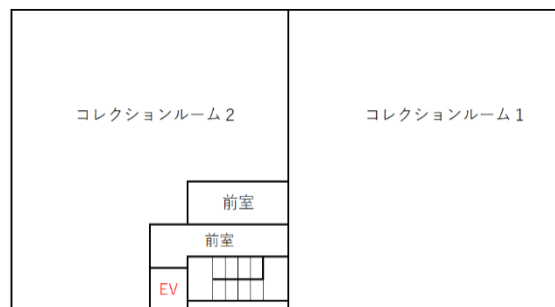
- ・コレクションナリウム

収蔵庫としての機能と展示ギャラリーの機能を併せもつ新収蔵庫棟。1階に展示と収蔵空間を両立させたコレクションギャラリー、2階に収蔵スペースを設置。

1階



2階

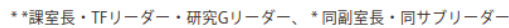


(4) 施設状況

- ・展示関係：4,350 m²
- ・管理関係：364m²
- ・収蔵関係：3,681 m²
- ・研究関係：2,185 m²
- ・教育普及関係：1,375 m²
- ・エントランス：360 m²
- ・機械、その他：8,160 m²



令和6年9月1日現在



令和6年9月1日現在

※1 (併任)は兵庫県立大学 自然・環境科学研究所教員の併任

(3) 職員配置

(令和6年9月1日現在) ※ 兵庫県立大学 自然・環境科学研究所教員(併任)

名誉館長
名誉館長
館 長
副 館 長
次 長(事務系)
次 長(研究系)
館長補佐 兼 総務課長
事業推進部長

岩槻 邦男
中瀬 勲
村上 哲明
石田 弘明※
山田 剛之
赤澤 宏樹※
安田 知一
八木 剛

【マーケティング及びマネジメント部門】

■総務課

課 長
主 査
主 任
副 主 任
副 主 任
主 事
主任技師

安田 知一
小川 麻未
武田 英里
長田 智子
和田 直也
水畑 拓実
塚本 健司

■企画・調整室(研究員兼務)

室 長
副 室 長
主任研究員
主任研究員
研 究 員

高田 知紀※
池田 忠広※
黒田 有寿茂※
山田 量崇※
李 忠建

■恐竜タスクフォース(研究員兼務)

リーダー
サブリーダー
副 館 長
主任研究員
主任研究員
研 究 員
研 究 員

池田 忠広※
田中 公教※
石田 弘明※
半田 久美子
廣瀬 孝太郎※
久保田 克博
生野 賢司

■D&I タスクフォース(研究員兼務)

リーダー
サブリーダー
主任研究員
研 究 員

橋本 佳延
廣瀬 孝太郎※
藤井 俊夫
福本 優

【事業推進部門】

■生涯学習課

主任指導主事兼課長
主任指導主事
指導主事
社会教育推進専門員
社会教育推進専門員
社会教育推進専門員

佐野 知彦
藤本 将宏
中原 洋彦
長澤 和弥
大垣 喜代和
奥山 勝巳

■生涯学習推進室(研究員兼務)

室 長
副 室 長
主任研究員
研 究 員
研 究 員

高野 温子※
三橋 弘宗※
山崎 健史※
久保田 克博
太田 菜央

■地域連携推進室(研究員兼務)

室 長
副 室 長
主任研究員
主任研究員
主任研究員
研 究 員

生野 賢司
鈴木 武
藤本 真里※
頼末 武史※
田中 公教※
衛藤 彬史

■Kids タスクフォース(研究員兼務)

リーダー 半田 久美子
サブリーダー 小舘 誓治※
主任研究員 八木 剛
主任研究員 大平 和弘※
こども環境体験コーディネーター 辰村 絢
こども環境体験コーディネーター 河田 麻美

■次世代タスクフォース(研究員兼務)

リーダー 京極 大助
サブリーダー 衛藤 彬史
主任研究員 高橋 鉄美※
主任研究員 山崎 健史※
主任研究員 中濱 直之※

【研究開発部門】

■自然・環境評価研究部

研究部長 高野 温子※
(地球科学研究グループ)
主任研究員 池田 忠広※
主任研究員 半田 久美子
主任研究員 廣瀬 孝太郎※
主任研究員 田中 公教※
研 究 員 久保田 克博
研 究 員 生野 賢司
研究員(再任用) 加藤 茂弘

(系統分類研究グループ)

研究部長 高野 温子※
主任研究員 太田 英利※
主任研究員 山崎 健史※
主任研究員 山田 量崇※
研 究 員 李 忠建

■自然・環境マネジメント研究部

研究部長 藤本 真里※
(生態研究グループ)
主任研究員 頼末 武史※
主任研究員 高橋 鉄美※
主任研究員 三橋 弘宗※
研 究 員 京極 大助
研 究 員 太田 菜央

(環境計画研究グループ)

次長(研究系) 赤澤 宏樹※
研究部長 藤本 真里※
主任研究員 高田 知紀※
主任研究員 大平 和弘※
研 究 員 福本 優
研 究 員 衛藤 彬史

■自然・環境再生研究部

研究部長 石田 弘明※
(生物資源研究グループ)
研究部長 石田 弘明※
主任研究員 藤井 俊夫
主任研究員 橋本 佳延
主任研究員 黒田 有寿茂※
主任研究員 中濱 直之※

(コミュニケーション・デザイン研究グループ)

主任研究員 八木 剛
研 究 員 小舘 誓治※
研 究 員 鈴木 武※

■研究・シンクタンク推進室(研究員兼務)

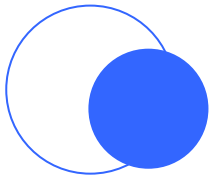
主任研究員	大平 和弘
主任研究員	中濱 直之※
研 究 員	衛藤 彬史
研究員(再任用)	加藤 茂弘

■新ビジョン実現タスクフォース(研究員兼務)

主任研究員	黒田 有寿茂
主任研究員	山田 量崇※
主任研究員	田中 公教※
研 究 員	京極 大助
研 究 員	生野 賢司
研 究 員	福本 優

■コレクション管理・活用室(研究員兼務)

主任研究員	八木 剛
研 究 員	久保田 克博
研 究 員	李 忠建
研 究 員	太田 菜央



各研究部の概要

■自然・環境評価研究部

自然環境保全の基盤となる地形学や地質学、過去と現在の生物（とりわけ脊椎動物、昆虫をはじめとする節足動物、軟体動物、維管束植物、蘚苔類など）を対象とした系統分類学や体系学、形態学、進化生物学、生物地理学等の分野の調査研究と資料収集活動に取り組んでいます。

またこれらの成果に基づき、過去から現在、兵庫県内から地球全域にいたる時空間的な自然環境の変異変遷史、地域の生物相の形成史、そして生物多様性創出の原動力である生物間相互作用のさまざまな過程の解明を進め、さらに自然環境保全のための有効な提案も行っています。

■自然・環境マネジメント研究部

人間の生活は、農山村はもちろんのこと、都市においても自然と深く結びついて成立しています。人間による自然へのインパクトが強力になっている現在、自然と環境のマネジメントが不可欠になっているのは、このことによります。

本研究部では、人間と野生動物の共存、自然と調和した地域づくり、都市の再生などに関する資料収集・調査・研究を行い、未来の人と自然のあり方を探求します。

■自然・環境再生研究部

生物多様性の保全・復元・再生に向けた研究や人と自然の共生に必要な科学コミュニケーションのあり方とその具体的な方法の開発を目指した研究をおこなっています。生物多様性に関する研究では、照葉樹林、夏緑樹林、針葉樹林、里山林、湿原、海岸植生、半自然草原などの植生と、絶滅危惧種に指定されている野生生物を主な対象としています。また、生物多様性を保全・復元・再生するための方法・技術を開発し、その研究成果を行政機関などに積極的に提案しているほか、植生調査資料のデータベース化やジーンファーム（野生植物を育成・増殖するための施設）を活用したジーンバンク事業の推進にも取り組んでいます。